

年間第十八主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 14：13-21

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人を癒された。夕暮れになった時、イエスは彼らに食べる物を与えられた。イエスはパン五つと魚二匹を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになって、弟子たちは群衆に与えた。結局、すべての人が食べて満腹した。残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどであった。

（二）カテキズムの響き：『カトリック教会のカテキズム』の番号 #1333-1335、1365、2828-2831、2835、2837；YOUCAT #212、522-523

パン増加の奇跡では、イエスご自分のエウカリスチアでの唯一のパンがあり余るほどのものであることを前もって表すものです。キリストの命令に忠実に従う教会は、キリストが受難の前夜に、パンや葡萄酒の入った杯を取ったように、キリストの過ぎ越しを記念し、その栄光の再臨のときまでの行い続けます。そこで、イエスはエウカリスチアを制定された時、パンとぶどう酒の祝福によって、創造主の賜物を表すだけではなく、ご自分のからだになるという新しく決定的な意味をあたえました。エウカリスチアは、キリストの過ぎ越しの記念ですので、いけにえでもあります。いけにえとしての性格は、その制定の言葉に明かです。「これは、あなたの方のために与えられる私のからだである。私の血による新しい契約である。罪がゆるされるように、多くの人のために流された血である。」今日、司祭はこのキリストの言葉と聖霊の働きを願う祈りによって、キリストの体と血になり、エウカリスチアの祭儀を行います。

イエスがお教えになった主の祈りにおいて、「わたしたちの日ごとの糧を今日をお与えください」という祈願があります。「私たちに与えください」という言葉は、すべてのものを御父がお与えくださるはずだと信じ切っている子供たちの素晴らしい信頼心を表すものです。彼らは御父の摂理と恵み、さらに尽きないままざまな不安や心配から私たちを解放したいと望んでおられるのです。それは御父の限りない慈しみを認めることなので、御父に栄光を帰すことになるのです。また、イエスは山上の説教で、御父の摂理に協力する子供としてのこの信頼について力説しておられます。なぜなら、これは神である父と神の子供たちとの契約を表すということです。「私たちの糧を」という表現は、御父がすべての人の父であることを認め、さらにすべての人の必要事や苦しみなどを包含しながら御父に祈っているのです。生きるために必要な糧や、時機に応じた物的、霊的善をすべてお与えにならないはずはないことだけではなく、食べ物がなくて飢えている人たちの存在や世界の飢餓という悲しい現実であるので、真心から祈るキリスト者に、個人的な行動においても、人類家族との連帯という観点においても、自分たちの兄弟に対する実際的な責任ある行動をとるようにと促します。さらに、パンに飢えることではなく、水に渇くことではなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きとを持った人がいます。つまり、神の言葉とその霊とによって生きることです。ですから、主の祈りの第四の願いは、命のパン、すなわち、信仰のうちに受け入れる神のことば、エウカリスチアにおいていただく体に関するものなのです。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号 #276、592-593）

#276 主の祈りにおける「私たちの日毎の糧をお与えください」という願い：

#592-593 私たちは子としての信頼を込めた委託をもって、自分が生きるために必要な日毎の糧を神に願うだけではなく、正義と分かち合いによって、ある人の豊かさが別の人の必要を賄えるようになるためです。また、この願いは、キリストであるみ言葉と御体（ミサの祭儀）への飢え、また聖霊への飢えにかかわるものです。

最後の祈り：主日のミサの第四奉献文において、「感謝の賛歌」前の祈りをご利用ください。